留学生の眼　⑨台　湾

留学生とは

社会科学研究科留学生　王（ワン）　世（シー）　和（ホウ）

您好！今日は！

日本人の精神を象徴する桜がまた，あっちこっちで咲いている。日本で，このきれいな桜を見たのは２回目である。新しく広島に来ている後輩と平和公園を散歩しながら，この一年間のことが心に浮かんできた。

私を含めて，日本にいる留学生は皆，何かを勉強しようと，日本の方とつきあおうと思って，日本にやって来たのは動機であろう。一方，国際化を目標とする日本の方も親切に面倒を見てくれるということも事実だと思う。このような背景で，平和都市の広島で，「国際交流」ということがうまく行けるはずであるが，なんとなく留学生と日本人の間には，どこかが間違って変になっていると，私が感じた。「なぜ日本人は……か」と，疑いながら，寂しさを感じる留学生は多いであると同時に，それらの疑問を解こうとしている日本の方も決して少なくない。両方とも親切な手を出そうと思うが，両方とも「国際交流」に困っているのは一般的な事実であろう。

「留学生ですか。大変ですね。」と挨拶して，話しに詰まってしまう日本人が，経験には多い。「日本語が上手ですね。」と言われて，次の話題が出てこない経験は，誰にもあるようである。留学生とは，めずらしい人間で，それぞれの国の典型，または代表だという考え方が，この社会に存在しているようである。このような気持の前提があったこそ，留学生が「外人」になったり，学生ではなくなったりして，人間と人間とのつきあいができなくなるのもあたりまえであろう。日本に来る前に，留学生はその国の一人一人であって，国民全体の代表でもない，少数民族でもない。外国のことがよく分からないが，母国のことがすべて分かるわけではない。これは，日本に来てからも変わらないことと思う。「留学生」という言葉が，「留学＋学生」であるなら，学生としての身分は間違いはない。違うのは，勉強する環境の違いだけである。人間は変わっていない。変わったのは身の周りの環境だけである。もし，これは間違っていなければ，身の周りの環境にいる人々の考え方が大切なことになるのも考えられるのであろう。

日本のことがよく分からなくても，日本語が下手でも，少しずつ教えてほしい。普通の学生と見てほしい。人間と人間とのつきあいがほしい。めずらしい人間と見ないで，留学生に関することについて，公式的な定義をくださないでほしい。